

〈書評：キューバ——体制移行への視角〉

「ユートピア」の憂鬱

——イグナシオ・ラモネによる

カストロ・インタビュー 『二声による伝記』*——

波 津 博 明

1 はじめに

キューバの最高指導者フィデル・カストロ国家評議会議長は昨年7月、モンカダ兵営襲撃53周年記念日の演説の後、倒れた。その後何度か、メディアに入院中の姿を見せているが、既定方針通り、すでに実弟のラウル・カストロ共産党第二書記が事実上の後継者として権限を行使している。

1959年の革命以来、約半世紀にわたったカストロ時代が終わりつつあることは間違いない。「社会主義」を標榜する国家は今やキューバ、中国、北朝鮮、ベトナムの4カ国のみとなった。しかし、その共通点はほとんど、一党支配体制であることにのみある。特異な世襲支配体制のもとにある北朝鮮との異質性はいうまでもないが、中国とベトナムも急速な資本主義化により、社会主義制度の根幹を維持するキューバとは異なる体制に転換しつつある。その意味で、カストロ時代の終わりは、いわば地上唯一の社会主義国が迎えた歴史的な局面といえる。

そのカストロが倒れる直前、2006年4月にスペインで出版されたのが、本書『フィデル・カストロ——二声による伝記』である。

カストロとのインタビューは、ジャーナリストのものした作品を中心に、これまでに何冊も出版されており、うちいくつかは邦訳も出ているが、フ

ランスの月刊紙『ルモンド・ディプロマティーク』のイグナシオ・ラモネ編集長による本書は、対話時間、活字化された分量ともに最長最大である。

本書でカストロは、温暖化を含む環境問題を、米国主導のグローバリゼーション、その背景にある消費社会に対する批判と結びつけながら論じ、政治指導者としては希有の洞察力を示す一方で、市民の自由や政治的権利の問題では、「帝国主義の干渉との闘い」に一切を収斂させる従来型の議論に終始している。それは、キューバ革命の成果と限界を改めて実感させる。カストロの病状（病名が「国家機密」とされているところにも、「限界」が示されている）を考えれば、本書が最後のインタビューになる可能性は高く、そうなれば、世界に向けたカストロの事実上の「遺言」ということになる。「世界唯一の社会主義国」の今後を考えるうえでも、極めて重要な資料となろう。

これまでの主なインタビューの特徴も検討しつつ、出来る限り生の言葉を引用しながら、稿を進めて行きたい。

2 本書の概要と成立過程

本書は序章のほか26の章からなる。19世紀の独立闘争を語った第1章に続き、第2章以降第9章までにおいて、幼年時代から、モンカダ兵営襲撃を経て1959年の革命勝利に至る道程を述べる。第10章からは革命後のキューバについて語る。主なテーマは、米国の支援を受けた反革命派のブラヤ・ヒロン上陸、1962年のミサイル危機を含め、多岐にわたるが、これまでにない発言が目立つのは、ソ連の崩壊以後を語る第17章以降である。中でも、オチョア将軍と死刑（第18章）、キューバと新自由主義的グローバリゼーション（第19章）、2003年の反体制派逮捕（第21章）、カストロ後はどうなるか（第26章）などは、とくに注目すべき発言を含む。

ラモネによると、カストロとの対話というアイデアが生まれたのは2002年2月、会議でハバナに滞在していた時だった。ラモネがカストロに、自ら参加した前年のポルトアレグレでの世界社会フォーラムについて語ると、

新自由主義とグローバリゼーションへの反対姿勢で知られる、この毎年の催しについて、カストロは「もう一つの世界」を目指す運動を称賛し、こう語ったという。「異なる抗議方法を用いる新たな反乱世代が立ち上がり、世界のボスたちを震え上がらせている」。

ラモネは、カストロが関心を寄せる「新しい世代」に、革命家カストロの軌跡を伝えることが必要だと考えるにいたる。欧州の若い世代は、カストロを「冷戦期の人物、歴史的に克服された時代の指導者」としてしか認識しておらず、「ハバナの体制は不信、批判、反論を引き起こす」存在であり、「革命を評価するのに冷静かつ理性的な見解を示す人に出会うことができます困難になっている」からである (p.12)。

このときグローバリゼーション批判の象徴であるメキシコ・サパティスタ民族解放軍のマルコス副司令官へのインタビューを刊行したばかりのラモネは、カストロに、「マルコスに対してと同様な、しかしはるかに長大なインタビュー」を提案した。翌2003年になって、カストロはこの提案を受け入れ、その後自動車や飛行機での移動中を含め、様々な場所で、インタビューは合計100時間に及んだ。

『ルモンド・ディプロマティーク』は、フランスを代表する高級紙『ルモンド』が1954年に創刊した国際問題専門の月刊紙で、1991年、スペイン出身のラモネが編集長に就任した。「ディプロ」の愛称でよく知られるこの新聞は、日刊の『ルモンド』が政治的には中道ないしは中道左派に位置するのに対し、左翼的立場からの徹底した新自由主義批判が特徴である。編集長ラモネ自身も、反グローバリゼーション運動を展開する NGO 「ATTAC」(市民のために金融投機課税を求める連合)の創設者として知られる、新自由主義批判の代表的論客の1人である。ラモネのもとで部数は30万部にまで増え、外国版も26言語67ヶ国版(うち活字版34、電子版は無料の日本語版を含め33)に達し、活字版の発行部数は計150万部にのぼる¹⁾。日本でも、ラモネの著作はすでに3冊が翻訳出版されている²⁾。

長時間の対話から生まれた本書は、ラモネの狙い通り、キューバ革命と

指導者カストロの光と影を浮き彫りにすることになった。キューバ革命から半世紀、「冷静かつ理性的」な革命評価を下すに当たって、本書の資料的価値は極めて高いといえるだろう。

3 過去の主なインタビュー

数あるカストロ・インタビューのうち最もよく知られているものは、1957年2月、『ニューヨーク・タイムズ』記者ハーバート・マッシューズが、シエラ・マエストラの革命軍拠点で行ったものである。このインタビューの政治的、そして歴史的な意味はまず第一に、ゲリラ指導者カストロが健在であることを証したことにあった。

カストロの部隊が前年12月、グランマ号でメキシコからキューバに上陸してから2カ月半。上陸計画の狂いとバティスタ軍の猛攻撃で、メキシコ出発時82人だったゲリラ部隊は壊滅的打撃を受け、当時わずか十数人に激減していた。バティスタ独裁政権は「カストロは死んだ」としており、彼らは半ば忘れられた存在になっていた。カストロは、自らの健在を示すこと自体が最も重要であることを認識し、カストロ派の革命組織「7月26日運動」の活動家を通じて、米国のジャーナリストとのインタビューをアレンジさせる。その誘いに応じてやって来たのが、マッシューズだった。

2月24日付けのニューヨーク・タイムズ1面に掲載された最初の記事（記事は26日まで3日連続で掲載された）は、米国とキューバの世論に大きな影響を与えた。カストロの狙いは以下の3点である。

1つは、バティスタ軍と対比してのゲリラ側の「公正」「寛大」のアピールである。「我々は多くの兵士を殺したが、捕虜を撃つことは絶対にない。尋問し、親切に話しかけ、武器と装備を取り上げた後は解放する。もっとも、彼らは帰営後に逮捕され、他の兵士への見せしめのため、軍によって射殺されることもある、と聞いている」（Chomsky 2003: 330）。

2つ目が米国民への友好のメッセージであり、これはアイゼンハウアー政権のバティスタ支援を牽制するためにも重要だった。カストロ発言は、

反共的空氣の強い米国に、自らの左翼性を薄めて印象付けることも狙っている。「我々は合衆国と米国民には、いかなる敵意ももっていない。我々は民主キューバのために、独裁に終止符を打つために戦っているのだ」(Chomsky 2003: 331)。

そして3つ目が、ゲリラ部隊は支援と期待に値するほど強力であることを、とりわけキューバ国民に伝えることであり、これが最も重要だった。「バティスタは我々に対して8000の兵士を展開している。当然の理由から、我々の数はいえない。しかし、バティスタが200人構成の部隊を投入しているのに対し、我々は10人から40人からなる数部隊で戦い、勝利しつつある」(Chomsky 2003: 331)。

カストロは米国を、キューバ及びラテンアメリカを支配する主要な敵と見なしていたから、「合衆国に敵意をもたない」という発言は政治的なレトリックであり、ゲリラ勢力の規模に至っては、明らかに虚偽である。言葉だけではない。カストロは、マシューズが見分けられない程度の距離に、同じゲリラ隊員を何度も行き来させ、多数の部隊が存在するかのように見せかけた。弟のラウルも無線で「第2戦線」と連絡を取るふりをしたが、第2戦線など、この時期には存在しなかった(Coltman 2003: 120)。

マシューズの記事は、ジャーナリズムの歴史においても特筆されるインタビューだが、何よりカストロ側にとって決定的な重要性があった。存亡の危機にさえあったゲリラの少数部隊を強力な革命軍として、そしてカストロ個人を英明かつ民主的な指導者として描いたことで、カストロ部隊への内外の関心と支持を強め、実際にカストロの勢力拡大、ひいては革命の勝利にもつながったといえるからである。

自らもカストロへの5回にわたるインタビューをもとに『フィデル——批判的肖像』(2002年)を書いたタッド・シュルツによると、マシューズは、かつて取材したスペイン内戦でのフランコ派の勝利に打ちのめされて、衝撃から長く立ち直れず、同じスペイン語圏のキューバ革命に新たな希望を見い出そうとしていたという(Szulc 2002: 407)。カストロ・インタ

ビューには、マシューズの夢も投影されていたのである。

シュルツは、その影響をこう述べる。「マシューズの記事の影響は巨大だった。ちょうどこの週、キューバでは検閲が廃止されたため、この記事はただちにキューバの新聞に転載され、カストロをいきなり英雄の地位に押し上げた」「マシューズの訪問はカストロにとって、大きな転換点になった。ある米国の雑誌の風刺漫画は、カストロの下にニューヨーク・タイムズの求職広告の宣伝文句をこう付け加えた。『私はニューヨーク・タイムズのおかげで今の職につきました』」(Szulc 2002: 413)。

マシューズによるインタビューは、その意味で、革命後に行われた一連のインタビューとはかなり性質を異にするといえる。その後のインタビューは、主にカストロの見解を知るためのものであり、カストロも、宣伝戦の色彩を大幅に薄めているからである（もちろん、政治指導者の発言である限り、常に読者への効果は考慮されているが）。

その後に公刊されたインタビューで、よく知られているものを年代順に挙げておく。まず、1958年から1965年にかけての数回のインタビューをもとにしたリー・ロックウッド『カストロのキューバ、キューバのフィデル』（初版1967年）がある。ここには、革命戦争中及び革命初期におけるカストロの立場がよく現れている。

カトリック左派「解放の神学」に属するブラジル人神父フレイ・ベトによるインタビューが、1985年に公刊された『フィデル・カストロと宗教』である。カストロは本書で初めて、幼年期から革命運動に入るまでの時代を回想している。もちろん、インタビューの眼目はカストロが「宗教」をどう位置づけているかであり、革命に共感を示す「解放の神学」がラテンアメリカで巨大な流れとなり、ニカラグアのサンディニスタ政権にミゲル・デスコト外相はじめ聖職者3人が入閣するといった時期だけに、本書は大いに注目された。

ベト神父と前後して、カストロは、米連邦下院議員マーヴィン・ディマリーのインタビューも受けた。これも25時間に及ぶ長大なもので、翌1986

年『歴史の流れは変えられない』とのタイトルで出版されている。重点は対米関係である。

1987年、計15時間にわたって行われたインタビューをもとに書かれた、イタリア人ジャーナリスト、ジャンニ・ミナーの『フィデルとの出会い』は、ゲバラのアフリカでの活動などについて、カストロが初めて語ったケースとして重要だが、後述するように、ゲバラのいう「新しい人間」についての発言に注目すべきものがある。

不思議なことに、90年代以降には本格的インタビューはないのである。

4 本書の意義

これまでのいかなる例よりはるかに長い時間をかけ、はるかに分厚い本となった本書を、自らインタビュー経験者であるジャンニ・ミナーは「記念碑的著作」と表現した³⁾。

本文570頁の中には、これまでのインタビューで語られたことを繰り返したり詳述したりした箇所も多く、集大成ともいえるが、新たな知見につながる発言も数多い。本格的なインタビューがここ10年以上世に出ていないということも、本書の価値を高めている。ソ連が崩壊し、米国が唯一の超大国となった1990年代以降こそ、キューバ社会主義にとって未曾有の試練の時代だったからである。

以下、章立ての順序とは離れて、まず1990年代に一段と加速したグローバリゼーションと新自由主義の評価、革命の影の部分、貧富の階層格差、イデオロギー問題、人権など、とくに注目すべき部分をとりあげたい。

4.1 消費社会批判

「キューバと新自由主義的グローバリゼーション」とのタイトルを冠したのが第19章である。環境問題やグローバリゼーション、さらには過剰消費社会に対する発言は、政治指導者の言葉とは思えないほどの確信と情熱に満ちている。北朝鮮はもちろんのこと、中国やベトナムの指導者でも、

このような認識を示すことはない。西欧やラテンアメリカを中心とするラディカルなグローバリゼーション批判派と同じ水準で、これらの問題を提起しているのは、カストロくらいである。後継者のラウルにこうした文明論が展開できるのか、疑問である。

カストロはまず、「毎年1兆ドルが軍拡に使われている」と、これまでもしばしば行ってきた軍拡批判を展開するが、続けて、「それと同じ金額が広告に費され、けっして満たされることのない消費の欲望をかきたてている」と、矛先を消費社会に向ける。消費社会はカストロによれば、「新自由主義的グローバリゼーションの段階にある資本主義が生み出した、最も暗い影のひとつ」である。「中国の13億人が米国と同じ比率で自動車を所有したらどうなるか」「消費社会は50年から60年で、化石燃料を使い果たすだろう。世界中の都市と道路を埋め尽くす車をどんなエネルギーが動かすことになるのか。このような暮らしは全く不合理な生活・消費の方法であり、石油が枯渇するころに地球に住んでいる100億の人々にとって、およそモデルにはなりえないだろう」(p.361)。

モータリゼーションに象徴される「豊かさ」を演出し、支配の安定性と正統性を確保しようとする中国共産党指導部からは出るはずのない言葉である。実際に中国のモータリゼーションはすでに加速度的に進行中であることを考えれば、この発言は潜在的には中国指導部批判でもある。キューバは米国との対抗上、対中関係を強化しているが、政策的にも思想的にも同調しているわけではないことを、示唆している。

しかし、カストロは中国評価には踏み込まない。「共産党支配下の資本主義」への判断も示さないし、モータリゼーションにしても、「中国人が米国と同じ比率で自動車を持ったら」と仮定の形で話しており、現実の中国のモータリゼーションには触れない。一部西側メディアには、カストロが実は、共産党支配下の中国型資本主義化を志向しており、ラウルの代で大きく舵を切るという見方もあるが、ラモネはそれ以上聞かない。

インタビューの常として、「発せられなかった質問」の問題は解かれな

いま残る。ラモネは、北朝鮮についても質問していないし、カストロは金正日体制にも朝鮮半島にも触れない。政治家とのインタビューでは、往々にして、政治的に答えにくい質問は回避される。一般にはそれこそが関心を引くテーマなのだが、相手が怒り出して、他の質問でも答える意欲を失ったり、インタビューを打ち切られたりすると元も子もない、とジャーナリスト側は計算するからである。しかし読者が隔靴搔痒の印象を持つのは避けられない。

環境問題については、カストロはますます雄弁だ。いわく、30年前、唯一警告を発したローマ・クラブに対して、人々はユートピア的だとか破滅論者だとか言って批判していたが、その後の四半世紀、環境問題は一直線に悪化した。「おそらく真のドラマは、この長きにわたって我々が生きてきた、この巨大な危険に対する無知そのものだろう」(p.356)。

1992年のリオデジャネイロ環境サミットを想起して、温暖化にも警鐘を鳴らす。「1992年以来、我々は何を達成したか。ほとんど皆無だ。それどころか、京都議定書は傲慢なボイコットにあい、炭酸ガスの排出量は減るどころか、9%も増えている。最もひどい汚染源たる合衆国では、18%も増加した。海と川は1992年当時より汚染され、1500万ヘクタールの森林が毎年消えている、これはスイスの面積の4倍だ。…人間社会は恐るべき過ちを犯し、今も犯しつつある」(pp.362-363)。

キューバにおける環境対策を問われ、カストロが例に挙げたのは有機農業である。「都市部の空き地を使い、有機栽培で年に300万トンの野菜を生産している。大気中に炭酸ガスを1グラムも放出せず、加えて30万人の市民に職を与えている」(p.363)。

キューバにおける都市の有機農業は注目されており、研究も進んでいる(吉田2002; Funes 2002)。ただカストロは、1990年代に「ほとんど叙事詩的規模の爆発的發展を遂げ」「キューバの家庭に対する食糧供給の安定を確保するにあたって決定的な役割を果たした」(Funes 2002: XVIII)都市農業の重要性そのものについては、論及しない。危機の1990年代、燃料

不足からハバナを中心に自転車交通が急速に拡大したが、カストロは、例えばオランダのごとく、自転車をモータリゼーションの積極的対案として交通手段の要に位置づけるような発想は示していない。貧しいがゆえに物質的「豊かさ」に縁のない国で、消費社会に対する代案を客観的に構想するのは難しいのか。市民による有機農業や自転車を交通システムの中核に据えることなど、キューバは事実として、持続可能な新しい文明社会のありようを、少なくとも部分的に提示しているが、カストロ自身には、そこまでの認識はないようである。とするならば、危機が去った後、エネルギー多消費型の生活・生産様式が復活する可能性があることをインタビューは示したといえるかもしれない。

万が一何らかの形で資本主義が流れ込んできたとき、革命体制下でさえ緊急避難的なものでしかない手段を積極的に引き受けて行く「新しい人間」は育っているだろうか。「消費社会」を批判する希有な指導者が、足元で実証されつつある「持続可能」な生活・生産の可能性に十分な注意を向けないのは、矛盾といえよう。

4.2 残る階層格差

第19章で、もう一つ注目されるのは、階級社会を終わらせたはずの革命から半世紀近くたっても変わらない階層社会の現実を、カストロが認め、嘆いたことである。

「我々は痛みとともに、何を見いだしたか。…社会の指導層を生み出してきた層はそのまま指導層にとどまり、一方、家族という単位でほとんど教育を受けていない貧しい階層では、その子供たち、つまり労働者の子、アフリカ系キューバ人の子はやはり、その層にとどまりがちだということだ…私は、経済的な意味の階級のことを話しているのではない。新しい社会の建設は見かけよりはるかに難しい。建設途上で見つかる問題がたくさんあるのだ」(pp. 364-365)。

カストロは、大卒でなければ管理職になれない現在、大学に行けないこ

の層の子弟を待っているのは「刑務所だ」とまでいう。20歳から30歳までの囚人を調査したところ、「信じがたいことに、管理職や知識人を親に持つ者は2%しかいなかった。逆に、いい学校に行けば、大部分が管理職か知識人の子で、下の階層の子はほとんどいない」という。

その後政府は、こうした階層の若者に重点的に大学教育を受けさせる措置を講じ、インタビュー当時、無職青年を含む下層出身の青年9万人以上を大学に迎え入れたという。18の刑務所でも大学の出前授業が行われている、というのである。(pp.366-367)。だが、こうした措置で固定した階層構造を変えることはできるのか。

カストロは、問題は階層 sector (正確には「部分」とでもなろうが、この言葉づかいには事態をあいまいにしたいカストロの姿勢がにじみ出ている)であって、階級 clase ではない、つまり「経済的な」階級概念ではない、という。しかし一方では、「いわば特権的な階層」(un sector, digamos, privilegiado)と「貧しい人々」(los pobres)ないしそれと同義の「周縁に追いやられた階層」(otro sector, más marginalizado)を対置させている(p.365)。であれば、その差は経済的な差以外の何ものでもない。

キューバには新たな支配階級が成立しており、彼らが民主化を妨げている、と主張する者もいる。ほかならぬチェ・ゲバラの孫、カネク・サンチェス=ゲバラである。

サンチェス=ゲバラは、ゲバラと最初の妻であるペルー人イルダ・ガデアとの間に生まれた娘イルダ・ゲバラの息子であり、ゲバラの最年長の孫である(1974年生まれ)。

メキシコ国籍のサンチェス=ゲバラは、カストロ体制には10代のころから批判的で、出国も考えていたというが³⁴⁾、母の死後、1996年にキューバを出国した。現在メキシコ・オアハカ市で作家兼グラフィック・デザイナーとして活動しているが、2004年公然と、徹底したカストロ体制批判を行った。メキシコ誌『プロセソ』の記者オメロ・カンパのインタビュー要請に対して、「誤解を避けるため」記者のインタビューは受けないとした

うえ、質問と答を自ら用意する「自己インタビュー」の形で、思いを明らかにしたのである (Sánchez 2004)。

カンパ宛書簡とそれに続く「自己インタビュー」において、カネクは自らを「共産主義者」としたうえで、カストロ体制を次のように批判する。革命後永続化したのは革命的な行動ではなく、「革命」体制を統制し続けようとする社会階級であり、革命（それはかつて運動だった）はずっと昔に滅んだ、と。「自分たちが革命される対象とならないよう、呪文のように革命を唱える人々によって、革命は制度化され、窒息させられた。官僚制度によって（チェはこれを予言していた）、腐敗によって、縁故主義によって、そして、キューバ『革命』国家というよく知られた組織体の垂直支配によって」。

サンチェス＝ゲバラは、現在のキューバを支配する階級を「プロレタリアを偽装するある種の貴族階級」と呼ぶ。「キューバ革命は、ある種のブルジョアジー、ブルジョアジーを人民から防衛する抑圧装置、人民をブルジョアジーから遠ざける官僚組織とを生んだ」「かつてのフィデル・カストロのような若き反逆者が現れれば、今日のキューバでは、ただちに銃殺されるだろう」 (Sánchez 2004 : 45-46)。

これは、トロツキーのスターリン体制批判を想起させる。もっともトロツキーはソ連の支配官僚層を独自の「階級」とは見なさなかったが、サンチェス＝ゲバラは「階級」claseであるとする。サンチェス＝ゲバラは「体制のイデオロギーはマルクス主義に発しているのだから、キューバへのイデオロギー批判は、もっぱらマルクス主義の領域で行わなければならない」と、内在的批判の必要性を語る。マルクス主義的概念としての「階級」であれば、キューバの支配層は、人民と和解不能な利害を持つ集団であり、その意味で、カストロ体制は、トロツキーの考えたソ連以上に「反人民的」ということになる。マルクス主義者によるソ連批判の例は、トロツキーだけでなく、枚挙に暇がないが、カストロ体制に対する本格的なマルクス主義的批判はあまり見られない。それだけに、サンチェス＝ゲバラ

の苛烈な批判は注目される。

チェ・ゲバラはソ連の政策に極めて批判的だったが、それは労働者の意欲を引き出すための物質刺激導入政策や、国益優先の対第三世界政策に対してであって、社会主義国における支配構造問題では特に発言していない。亡命ポーランド人ジャーナリスト、K・S・カロルはこう書いている。「労働者の決定権あるいは『自治権』の問題には、チェはある種の無関心を示していた」「彼は、スターリン時代のソ連が『官僚的に墮落』したというトロツキストの主張にも、ソ連共産党第20回大会で、修正主義的な新たなブルジョア階級が権力を掌握したとする毛沢東派の主張にも、全く同意していなかった」(Karol 1970: 285-287)。

ラモネはゲバラの孫の体制批判には言及していないが、ゲバラとトロツキーについては、第7章「チェ・ゲバラ」でフィデルに問う。「ゲバラはトロツキーに共感を持っていたといわれるが、当時それを感じたか」と。カストロの答は、「彼はマルクス、レーニンを擁護し、スターリンを攻撃したが、トロツキーについて語るのを聞いたことはない」というものだ。

しかし実際、ゲバラはトロツキーに興味と共感を持っていたらしい。元公安機関幹部ファン・ビベスは革命初期、ゲバラから著名なトロツキスト、アイザック・ドイッチャーのトロツキー伝『武装せる予言者』と『スターリン伝』を手渡された、としている (Vivés 1981: 96)。ゲバラが、この情熱的な評伝を自ら読んだだけでなく、わざわざ同志に貸して読ませようとまでしたことは、トロツキーへの強い関心を示しているだろう。それをカストロとの間で話題にしなかったとすれば、それは何を意味するのか、我々にはもはや知りえない。

今日のキューバでは、セリア・アルトがトロツキーを高く評価し、「フリーランスのトロツキスト」を自任している。アルトの立場は、ラテンアメリカ革命に対するコミットメントを続けるキューバ革命を永続革命論の視点からとらえるものである。彼女の論文はすべて国外で公開されており、国内でアルトの主張を知る人は少ないと見られる (ただし、ウェブ上の文

献は閲覧可能)。シエラ時代からの革命家で、大陸規模の文化活動の拠点となる「カーサ・デ・ラス・アメリカス」を創設し理事長を務めたアイデ・サンタマリアと、1960年代から20年にわたって文化相だったアルマンド・アルトの娘であるセリアは、自身も共産党員である。キューバ当局は、正統的とはいえないその言動を規制していないようだが、それには彼女が体制を批判するどころか、永続革命の模範として賞揚していることが大きいだろう。アルトは、「キューバ革命は、初期にスターリン主義に陥ったが、当初から一国社会主義路線を拒絶していたがために、その後生き延びた」とし、それを、「ラテンアメリカに永続革命の時代を開いたチェ・ゲバラ」と、革命の国際化路線をその後も貫いたカストロの功績とするのである (Hart 2006: 91-92)。初期のスターリン主義とは何か、それがどう克服されたのか、について、1980年7月26日にピストル自殺を遂げた母を持つアルトは具体的には語らない。

興味深いのは、アルトがトロツキーを知った経緯である。彼女が留学先の東ドイツから休暇で帰国した1985年、自宅で東独のスターリン主義体制に対する疑問を口にしたとき、父アルマンドが箆筒から取り出して、彼女にトロツキーの『裏切られた革命』と、ドイツチャーのトロツキー伝三部作を手渡した、というのである⁵⁾。いうまでもなく、三部作の第1部こそゲバラがビバスに渡した『武装せる予言者』である。ゲバラのエピソードもそうだが、キューバの文化行政の中核にいた人物が、「異端」の書物を、それも書棚ではなく「箆筒」に所蔵していた、というのは、それ自体興味深い。

本題にもどると、第7章で、カストロはスターリン評価にも言及している。「(ゲバラは)工業化など一定の分野ではスターリンの功績も認めていた」が、「スターリンに対しては、私の方が批判的だった」と、自らの反スターリン姿勢を強調するのである (p.168)。さらに、スターリンとトロツキーを比較すれば「疑いもなく、トロツキーのほうが知的だった」とも語っている (p.351)。こうした発言は21世紀の現在においては限定的

なインパクトしか持たないが、30年前なら間違いなく大きな波紋を投げかけていたはずである。

もっとも、カストロのスターリン観には独特なものがある。権力乱用、弾圧、個人崇拜などスターリンの問題を列挙するものの、カストロがとくに「大きな過ち」としたのは「1941年にドイツ軍の侵略を許したこと」なのである。流血の粛清、あの「大テロル」ではない。米国の攻撃からの防衛をすべてに優先させるカストロの姿勢を踏まえると、この「スターリン批判」は理解しやすい。同様の批判は、イラクのサダム・フセインに対しても見られる(第25章「今日のキューバ」)。カストロが強調するのは、イラク戦争の際にサダムがほとんど抵抗しなかったことの「なぞ」だ。「我々は2003年3月から5月まで、極めて注意深くあの戦争を見てきたが、サダムはなぜ抵抗しなかったのか。わからない。なぜ橋を爆破して米軍の進撃を遅らせなかったのか。弾薬庫は、空港は。すべてが大きななぞだ」(p.501)。ちなみに、バグダッドでもカブールでも、キューバは米軍侵攻の開始まで踏みとどまった数少ない外交団の一つだという。

4.3 反体制派と死刑

イラク戦争の直前、キューバ当局は反体制派約80人を逮捕し、75人が最長28年の刑を宣告され、ほかにフェリーを乗っ取って亡命を試みた3人は即時死刑となった。

「2003年3月の反体制派逮捕」をタイトルとする第21章は、キューバにおける人権問題が中心的テーマである。ここでは、特に興味深いテーマを2つあげる。

第一に注目されるのは、死刑に関する発言である。ラモネは、欧州連合内では死刑は許されず、「最悪の犯罪に対しては終身刑だが、実質的には最長で約20年」なのに、非暴力的な反体制派に28年は長すぎる、というところ、カストロは「[20年が] 最長とは知らなかった」と答え、逆に、「軍法上もか?」と尋ねる。

ラモネが、軍法下でも平時には死刑はなく、「最高刑は終身刑であり、欧州では、出身国で死刑もしくは20年以上の刑を宣告される可能性のある場合は、容疑者を出身国に送還することはできない」「だからこそ、平和的の反体制派に28年、という宣告に欧州は驚いたのだ」と説明する。カストロは死刑になったETA（「バスク祖国と自由」）メンバーがいたはずと反論しつつも、「ご教示に感謝する。欧州では死刑を廃止しただけでなく、終身刑も20年以上の刑もないとは」と驚きを伝える。ただ、「キューバでは実際には、当初から死刑の適用は停止されていた」（p.414）が、冷戦終結後かえって危うくなったキューバを守るために復活させざるをえなくなったのだ、と強調している。

続いて、「あなたに質問したい。いつから死刑を廃止できたのか」と、欧州での死刑廃止に再び強い関心を示し、フランスやスペインでの死刑廃止の経緯を詳しく聞く。死刑を存置していると欧州連合に加盟できないと聞いて、「では、チェコはどうなのか。ポーランドは、ハンガリーは」とたたみかけるように質問していく（pp.416-419）。

カストロの熱心さは印象的で、もしや早晚キューバは死刑を廃止するのではないか、と思わせるほどである。第22章「2003年4月の乗っ取り」では、カストロは「あなたを含む友人たちの求めに応じて、死刑廃止を進言してくれといえる日が来るだろう」（p.446）という。極めてもって回った表現で、真意を探るのは難しい。しかし、カストロが死刑を望ましい刑罰と考えていないことは読み取れる。

死刑については、第10章「革命——初期の前進、初期の問題」での発言も興味深い。革命戦争中のスパイや重大な裏切りに対する処刑は「ごく僅かしか必要なかったが、死刑執行の仕事は嫌われており、有志を探さねばならず……あれは頭痛の種だった」と述懐する（p.203）。また革命勝利後、バティスタ体制の戦争犯罪人たちをハバナの競技場で処刑したことについても、「あれは間違いだった。……ひどく悪い印象を与えた」と反省する（p.203）。本書では、死刑に一貫して否定的姿勢を見せているので

ある。

一方、第2のテーマ即ち同性愛者に対する抑圧では、こうした率直さは消える。第10章で、ラモネが「同性愛者を閉じ込める収容所もあった。これをどう見るか」と聞くと、カストロは「同性愛者に対する弾圧などないし、収容所もない」と言下に否定する (p.204)。収容所とは、同性愛者や兵役拒否者などを強制入隊させたといわれる「生産支援部隊」(UMAP)のことである。カストロは、徴兵制のもと、通常の兵役に従事できない者を、特に援農に動員するために設けられた組織がUMAPだとし、教育程度が低くて兵器を操作できない者、宗教的理由で兵役に就けない者、そして「軍内での偏見のため通常の部隊に配属しにくい同性愛者」に、祖国に奉仕する機会を与えたのだ、という。当時、同性愛者への偏見は強く、これを払拭できなかったことには「私に責任の一端がある」と認めるが、偏見が強かったのは、現在よりはるかに文化的水準の低い社会の、しかも軍のような場であって、「著名な文化人などは、同性愛者でも、十分な考慮と尊敬を受けて来たし、今も受けている」(p.206)という。

性的指向への許容度が有名か無名かで異なるというのも問題だが、カストロの責任は、同性愛者への偏見を除去できなかったことにだけあるのではないだろう。例えば、思想傾向を問題にされ、カストロとの直接対話を経て、自己批判(明らかに強要されたと見られる)した詩人エベルト・パディジャの事件(1971年)の後に開かれた、作家芸術家同盟特別会議での発言である。カストロ自身がここで、キューバは「似非知識人たちに、俗物根性、放縦、ホモセクシュアルその他の社会的逸脱を革命的芸術表現に仕立てあげてもらおう」必要はない、と同性愛を激しく攻撃しているのである(Coltman 2003: 233)。パディジャ事件と、この会議でのカストロ演説は、文学・芸術におけるスターリン主義化の象徴として知られるが、同性愛についても、最高指導者自身がホモフォビアを自任した発言として記憶されるべきだろう。

ビバスはUMAPの性格を、公安機関である「風俗取締隊」が創設した

「準軍事機関の形をとって、軍の管理の下に大規模に労働力を集めるための組織」とし、「風俗取締隊と革命軍の資料室で自ら調べた」データをもとに、こう述べる。「1965年8月、同性愛者に対する徹底した弾圧が始まった。もっとも、狙いは同性愛者だけではなく、すぐれて政治的なものだった」「対象を選ぶ基準は広範で、まずよく知られた同性愛者あるいは同性愛者の疑いがある者、次に『エホバの証人』、そして出国を希望する者、(中略)最後にイデオロギー的に問題のある知識人だった」「1つのバラックに200人もが収容され、サトウキビ畑で1日14時間も働かされた」「嗜虐的な待遇のため186人が自殺した」「虐待と強制労働のために72人が死に、507人が精神医療を受けるため入院させられた」(Vivés 1981 : 280-281)。UMAPに入れられた人々の数は38,641人に達するという。ピベスは14歳でゲリラ闘争に参加、のち国家公安局に勤め、1976年フランスに亡命した人物である。亡命者の主張は、一般には慎重に扱われなければならないが、公安機関の中枢にいた元革命家ならではの具体性があり、この証言は無視できない。

文学活動を「破廉恥罪」に問われ、投獄された作家レイナルド・アレナス(1980年に出国し、1990年ニューヨークで自殺)は同性愛者だったが、岩切徹に対して、釈放後の不安とUMAPの恐怖を次のように語っている。

雑誌はない、本はない、旅行はできない、映画はない。なんにもないから家に帰るしかない。帰ったら帰ったで…CDR(革命防衛委員会)の隊員に交替で監視され、その日何を食べたか、いつも何を考えているのかさえ筒抜けの状態…。友だちのなかには、UMAP…に送られた者もたくさんいた。宿を転々と変えたおかげで、わたしはなんとか逃げおおせたけれど。(岩切 1991 : 15-16)

アレナスは米紙に対し、カストロ体制には何より「人間的感性が欠如している」と批判し、「個人の発達を保証し、市民を非人間的にしない全面

的な民主主義」が実現し、キューバが「人間が成長し、希望をもって生きられる場所」にならない限り帰国したくない、と語っている⁶⁾。

しかし、アレナスが非人間的とする社会は、カストロによれば、正義のために己を捨てる「新しい人間」を生み出す新世界である。

4.4 新しい人間

最終の第26章（「フィデルの後はどうなる？」）で、カストロはいう。他国の民族解放を助けるために海を渡って戦い、死んだ「英雄的な国際主義の戦士」は2000人を越え、戦士として、教師、技術者、医師として国際主義的任務を果たしたキューバ人は合計50万人以上に達する、と。「他のどの国も、これほど輝かしい無私で誠実な連帯のページを誇ることはできない」（p. 531）。

正義のため無私の精神に生きる人間、つまりチェ・ゲバラのいう「新しい人間」がこれだけいる、とカストロは誇るのである。「新しい人間」についてカストロは、ジャンニ・ミナーとのインタビュー『フィデルとの出会い』では、より詳しく雄弁に語っている。「新しい人類」と題した同書第6章で、「キューバの人間がすべて新しい人間だとはいえない。しかし、人間の質における巨大な飛躍がわが国で起きていることは事実だ」として、例をあげる。「革命後のニカラグアが、教師を1000人送ってほしいと言ってきた。希望者を募ったら、3万人が応募してきた。（中略）我々は2000人を選んだ。その多くは女性だったが、彼女らは、ニカラグアの最も辺鄙な場所へ派遣されていった。それはまるで伝道だった。革命前、田舎や山の中に行きたいという教師や医師はいなかった。我々はいま、ニカラグア、エチオピア、アンゴラ、モザンビークなど、世界30カ国に医師を派遣している」「ニカラグアが医師を送ってほしい、とやってきたとき、その年卒業する医学生1000人から、ニカラグア行きの希望者を募った。そうしたら1000人のうち1000人が応募した。全員が同じ熱意を持っているわけではない。（中略）しかしだれも、自分が犠牲的精神と勇氣に欠けているとは思

いたくないのだ」(Minà 1991: 143-152)。特攻志願者は一步前へ、と上官に言われた時の皇軍航空兵の反応を想起するのは適切ではないだろう。殺し殺されに行くのではなく、逆に、人の命を助けに行くのである。しかしどこかに無理はないか。また一方、キューバを離れられるのなら、どこでもいい、と思った学生もいるだろう。「新しい人間」の理想は美しいし、そもそもいかなる理想も語られない現実世界にあって、カストロのこうした姿勢は注目すべきだろう。しかし、「1000人のうち1000人が応募する」事態に、カストロが異様さを感じていないことにも、注目せざるをえないのである。

4.5 革命は自壊するか

カストロは最終章で、「キューバ革命は自壊しうる」と警告している。「もし誤りを正せなければ、この多くの悪徳、盗み、逸脱、新富裕層 *nuevos ricos* の金の供給源に終止符を打てなければ、我々は自らを破壊することになる」(p. 567)。

しかし、国有財産の流用を含め、こうした「悪徳」の多くは、一人一人の倫理の問題よりも、基本生活物資の配給さえ遅延や欠配が頻繁に起きるというシステムの欠陥、そして階層か階級かはともかく、国民が支配する側とされる側に分かれていることに、起因するのではないか。取り締まりと精神主義だけで解決できる問題ではないだろう。

自壊しうるという危機感はおそらく正しいし、カリスマ的指導者カストロがいなくなれば、その可能性は著しく高まるだろう。ただそれは、抑圧と硬直性で押し潰されるというより、ソ連で起きたような、共産党官僚が自らに有利な資本主義化に走り、内部から崩壊する可能性である。ソ連や東欧諸国では、官僚たちが自らの立場を利用して国有財産を「合法的」に山分けし、新たな資本家に転身する一方、国民はあらゆる保証を失って、さらに困窮化するという事態が起きた。ラモネは、こうした経験については質問しておらず、カストロも語っていない。

以上取り上げたほかにも、注目すべき発言、あるいは発言の不在は多い。例えば、ラテンアメリカにおいて革命と武装闘争の時代は終わったのかとの問いに、カストロは、いずれ「革命」は起きうるという表現をただけで、武装闘争については、ついに答えなかった。メキシコのサパティスタ民族解放軍を評価しつつも、彼らがゲリラでありながら、武装革命による権力獲得を目指さないことの意味については語らない。「言論の自由」については、「それが反革命のための自由のことなら、我々はそのような自由の味方ではない」と、予想どおりの答えをし、西側メディアの「自由」について「メディア所有者の自由ではないか」と反問する。このテーマでは、ラモネはいくつもの関連質問をしているが、カストロの答は、米帝国主義の包囲下では、敵の言論を許すことはできない、という論法に終始する。「革命を進めるための複数の議論なら許すのか」あるいは「革命に反対しない範囲の言論なら許すのか」という質問をすれば、カストロは何と答えただろう。カストロ自身が、1961年6月の知識人との会合で、「革命の内側にいる者にはあらゆる自由を与え、反対する者にはいかなる自由も認めない」と言明しているのだが。

5. キューバの将来

カストロは「我々はいくつか理想主義の誤りを犯した。たぶん、あまりに速く前進しようとしたのだろう」と、過去を自省的に振り返りつつ、あくまで理想を掲げる。「もし人類が生き残っていれば」と強調しながらも、「100年後には、人は我々を、思い出すにも値しない野蛮で反文明的な部族として見るだろう」「未来の世代は我々を、我々が原始時代の人間を見たように見るはずだ。私は確信している」(p.532)と語るのである。

政治指導者からこのようなビジョンを聞くということは、とりわけ昨今、奇跡のような経験である。カストロは、人類に未来があるなら、それは共産主義であると信じているようである。もし「暴力装置である国家の消滅」をもって共産主義と考えているのであれば、カストロが思い描く

「100年後」には、革命軍や公安機関、相互監視組織「革命防衛委員会」は、消滅しているのだろうか。カストロは、例えば同性愛者の抑圧を、「思い出すにも値しない野蛮で反文明的な」行為と自覚しているのか。であれば今こそ、社会主義と自由の問題が焦点となった1960年代初期の論争を振り返ることが必要ではないか。

百年単位で歴史を俯瞰する壮大な理想主義に立ったうえで、平和的反体制派でさえ投獄されるような現実に対する根底的再検討に踏み込んでいれば、本書は、マッシュューズのインタビューをはるかに越える歴史的意味を持つものになっただろう。

グローバリゼーションと新自由主義に対する批判が世界に広まり、ラテンアメリカでは、新自由主義に明確に反対する政権が続々生まれ、今や主流の位置についている。最も急進的なベネズエラのチャベス政権は、安価な石油供給でキューバを助け、キューバは多数の医師を派遣して、ベネズエラの貧困層に医療を提供している。このような互惠的な国際主義は世界史上まれである。そして、石油大国の大統領は今、カストロを「兄と呼ぶべきか、父と呼ぶべきか迷う」(Guevara 2005: 95) 存在として仰ぎ見る。孤立時代には想像もできない事態である。ソ連崩壊以来、キューバにとって最良の外交環境が生まれている。

だからこそ、責任は重大なのではないか。新自由主義的グローバリゼーションへのアンチテーゼたりうる自国のあり方について、キューバはかつてない責任を有しているからである。「人間的感性の欠如」(アレナス)とさえ非難された抑圧状況を「米帝国主義」との臨戦態勢に帰して正当化してられる時代ではない。キューバの将来は、ラテンアメリカ規模の、あるいは世界規模の問題となった。「生き延びる」ことが至上命令だった1990年代前半とは別種の、もしかすると、はるかに重大な試練を迎えているのである。

そうした時期に公刊された本書は、発せられた言葉、そしてそれ以上に、発せられなかった言葉によって、キューバ革命の明暗、将来への希望と不

安を浮き彫りにした貴重な労作といえよう。

*Ignacio Ramonet, *Fidel Castro : Biografía a dos voces* (Barcelona : Debate, 2006), 570+80 pp.

註

- 1) <http://www.monde-diplomatique.fr/int/> (2007年2月10日アクセス)
- 2) 邦訳のあるラモネの著書は共著を含めて、以下の3冊である。
 - [1] イグナシオ・ラモネ『マルコス・ここは世界の片隅なのか——グローバル化をめぐる対話』湯浅順夫訳、現代企画室、2002。原著 Ignacio Ramonet, *Marcos, la dignité rebelle* (Paris : Edition Galilée, 2001)。
 - [2] イグナシオ・ラモネ『21世紀の戦争』井上輝夫訳、以文社、2004。原著 Ignacio Ramonet, *Guerres du XXI siècle* (Paris : Editions Galilée, 2002)。
 - [3] イグナシオ・ラモネ、ヤセク・ヴォズニアク、ラモン・チャオ『グローバル化・新自由主義批判事典』杉村昌昭、信友建志、村澤真保 訳、作品社、2006、原著 Ignacio Ramonet, et al. *Abécédaire partial et partiel de la mondialisation* (Paris : Editions Plon, 2003)。
- 3) *Juventud Rebelde*, Dec. 2, 2006.
- 4) *The Times*, Oct. 9, 1992.
- 5) http://www.marxist.com/History/who_is_Celia_hart.html (2007年2月1日アクセス)
- 6) *Miami Herald*, Dec. 28. 1988.

参考文献

- 岩切徹. 1991. 『亡命者』岩波書店。
- 吉田太郎. 2002. 『200万都市が有機野菜で自給できるわけ』築地書館。
- Frei Betto. 1986. *Fidel Castro y la religión* (Buenos Aires : Editorial Legasa).
- Chomsky, Aviva et al. (eds.) 2003. *The Cuba Reader* (Durham : Duke University Press).
- Coltman, Leycester. 2003. *The Real Castro* (New Haven, Yale University Press).
- Dymally, Mervyn and Jeffrey M. Elliot. 1986. *Fidel Castro : Nothing Can Stop the Course of History* (New York : Pathfinder)
- Funes, Fernando. et al. 2002. *Sustainable Agriculture and Resistance* (Oakland : Food First Books)
- Guevara March. Aleida. 2005. *Chávez : Un hombre que anda por ahí* (Mel-

- bourne : Ocean Press)
- Hart, Celia. 2006. *It's Never Too Late to Love or Rebel* (London : Socialist Resistance).
- Karol, K. S. 1970. *Les guérilleros au pouvoir : l'itinéraire politique de la révolution cubaine* (Paris : Editions Robert Laffont).
- Lockwood, Lee. 1969. *Castro's Cuba, Cuba's Fidel* (New York : Vintage Books)
- Minà, Gianni.(translated by Mary Todd) 1991. *An Encounter with Fidel* (Melbourne : Ocean Press).
- Sánchez Guevara, Canek. 2004. "Un ideal falsificado," *Proceso*, Oct. 17., pp. 44-47.
- Szulc, Tad. 2002. *Fidel : A Critical Portrait* (New York : Harper Collins).
- Vivés, Juan. 1981. *Les Maîtres de Cuba* (Paris : Editions Robert Laffont).